



看護師同士でAI問診の操作方法を確認

AI問診導入で効率化

石念
札幌
札幌

質問を自動で生成

白石区の札幌白石記念病院（野中雅理事長・103床）は、スムーズな外来診療に向けAI問診を導入した。看護師や医師事務作業補助者の業務

来患者に対応している。そのうち、高齢化による影響や、頭痛、めまいなどから紹介状なしの初診患者が30人ほど訪れ増加傾向にある。

初診患者へは看護師が問診するが、情報量が多い場合など時間がかかり、次の患者の待ち時間が長くなるといった課題があるほか、電子カルテへの転記を行う医師事務作業補助者の作業負担も起きていた。

導入したAI問診システムは、患者が解答した症状によってAIが最適な次の質問を自動で判断し生成・聴取する。AIは5万の医学論文を基礎に、医師監修のもと常に新しいエビデンス情報を更新しており、膨大かつ最新のデータベースから、患者の回答に合わせて問診内容を自動で生成するため、質問項目が固定化された従来の問診よりもさらに詳しい質問を行うことができる。

待ち時間に待合室の座席に貼られているQR

コードを読み取りスマートフォンで回答できるほか、来院前に同病院のホームページを通じてパソコンやスマートフォンで事前問診を行える。

1人での回答が難しい高齢者などには、病院に4台用意しているタブレット型端末を看護師のサポートのもと操作し、表示された質問に選択肢を選んで答えていく。

こうした事前問診や看護師の業務効率化により患者の待ち時間は短縮。電子カルテへの転記作業もワンクリックで行うこ

とができ、医師事務作業補助者の作業負担も軽減した。

同病院では、外来看護師などによるプロジェクトチームを立ち上げ、AI問診の流れやタブレットの操作方法を事前に学習。ステントやペースメーカーなど患者の体内に金属が入っていないかを問う質問を追加で組み込んだ。

質問の結果から疑われる疾病を5つほど表示する仕様となっており、今後は数カ月間活用して疾

病の整合性をメーカー側にフィードバックし、問診精度を高めていくとしている。また長期的な活用によって月ごとの外来の統計などのデータ分析も実施する。

笹森大輔経営企画部長は「院内のDX化は働き方改革に向けて必須。効率化によってスタッフが患者のそばにいる時間を増やすことができる。今後も患者呼び出しシステムの導入やRPAの強化を図っていきたい」と力を込める。